

**第14回（通算第42回）
日本アメリカ史学会
年次大会**

**自由論題・シンポジウム
記録集**

**2018年1月
日本アメリカ史学会**

2018年1月30日

日本アメリカ史学会第14回年次大会

(2017年9月23日、24日 於 愛知県立大学長久手キャンパス)

自由論題・シンポジウム記録集

[自由論題報告 セッション1](#)

[自由論題報告 セッション2](#)

[シンポジウムA](#)

[「言論空間から見るアメリカ史——奴隷制問題をめぐる印刷文化と連邦体制」](#)

[シンポジウムB「マイノリティ史研究と環太平洋世界」](#)

[シンポジウムC「アメリカ史のなかの『余暇』」](#)

※登壇者の名前ならびに所属は報告時のものです。

※セッション名をクリックしていただくと各セッションに飛びます。

自由論題報告 セッション1

日時： 2017年9月24日（日）10時00分～12時00分

会場： 愛知県立大学長久手キャンパス 講義棟東棟 H201 教室

報告： 中村信之（大阪大学）

「戦前期日米学生会議——知的交流の場としてのミドルグラウンド」

水野剛也（東洋大学）

「戒厳令下のハワイ日本語新聞と統制——真珠湾攻撃から報道許可制度の施行まで」

上林朋広（一橋大学・院）

「複数の自伝、複数の書き手、複数の自己——ブッカー・T・ワシントン自伝の出版史的考察」

司会： 大津留（北川）智恵子（関西大学）

中村信之会員の「戦前期日米学生会議——知的交流の場としてのミドルグラウンド」では、先行研究が主として日本側の外交史

料をもとに、日米学生会議を民間の活動として論じてきたのに対し、本研究ではカーネギー財団所蔵の史料を用いることにより、

アメリカの団体や学生の動きも分析に加える新たなアプローチが可能であった点が示された。

報告タイトルの「ミドルグラウンド」という概念は、白人とネイティブ・アメリカンの関係に用いられるものであるが、本研究が従来の広義と狭義の文化外交の中間にあたるため、試験的に用いた。また日米学生会議の参加者は個人としてではなく、日本側、米国側と国家を代表して交流を行っている。そのため、日系 2 世など国家の枠組みを使うことでこぼれ落ちてしまう存在や概念を、ミドルグラウンドという概念で取り込める可能性があるのではないかと説明された。

日米学生会議では、米国側が意見を交わらす場と認識したのに対し、日本側が相手を説得する場と認識したという差異が認められた。会議のほかに視察旅行やホームステイもあり、日本は外交政策の正しさを示す意図で、満州や朝鮮を視察先とし、朝鮮人学生が参加者ではなく通訳として同行していた。次年度の企画は前年度参加者から選ばれたものの、日本側は政府による選抜、アメリカ側は学生も含めて選抜作業を行っていた。

日系 2 世はアメリカでも日本でも、トランスナショナルな側面が理解されうずに板挟みにあった。日米学生会議に参加することを通して日系のエスニシティの価値が確認された点を、羅府新報の記事やインタビューに基づき立証が試みられた。例えば、日系新聞の記事の中には、日系 2 世は白人に劣らないとして、排日移民法の改正を訴えるものもあった。日系 2 世は中途半端だという偏見に対して、日本とアメリカの双

方を大切にできるトランスナショナル性への理解や期待が読み取れたと報告された。

先行研究では、学生会議が日本のプロパガンダの色が強いものとされてきたが、史料から近代日本が躍進する姿や自国の中国政策の正しさを官民一環となって示そうとする姿がある一方で、日系 2 世をめぐり日本臣民としての再教育とヘリテージ教育という異なる意図が混在していたことも指摘された。またアメリカ側の史料から、日米の交流を通して日本人学生が自国大統領をも批判するアメリカの学生から民主主義の精神を学んだり、アメリカ人学生が集団主義的日本文化にも魅力的部分があると報告したことが紹介された。

フロアからは、太平洋問題調査会 (IPR) との関係が問われ、直接的な関りは引率教授が IPR のメンバーであった程度であるとの回答であった。IPR は排日法を契機として始まっているが、日米協会を含め多くの国際文化交流団体は排日法成立以前から日本人移民の権利を守るためのプロパガンダ団体であったと補足された。

財団や日系コミュニティとのつながりについての質問があり、カーネギーの史料は膨大なため日系 2 世に関しては今後引き続き研究課題とする旨の回答がされた。YMCA など日系人のコミュニティ、日米協会など、また国際組織とは違うが地域で国際理解を進める団体も、この活動に多く寄付したと説明された。

最後に、従来先住民に用いられ、権力関係と文化の関係を論じるミドルグラウンドを、対等な日米間の学生会議の分析に用いた理由が問われた。被支配者と支配者の関係性を見直す重要な概念なので、対等な学

生同士の立場には当てはまらないが、姉妹会議としての日比学生会議の存在も考慮に入れると、「脱亜論」とアジア主義の狭間で揺れる近代日本ナショナリズムを反映していた可能性もある。今後は会議が本当に対等であったのかという点も検討していくと述べられ、第一報告が締めくくられた。

続く水野剛也会員の「戒厳令下のハワイ日本語新聞と統制—真珠湾攻撃から報道許可制度の施行まで」は、日本軍の真珠湾攻撃後、軍が政府の権力を全て握り、市民生活の全般を掌握する中で、日本語新聞への対応が禁止から許可へと変遷する意味を分析した。

先行研究ではハワイの英語新聞に関する研究は進む一方、日本語新聞の研究は40年以上されておらず、おそらく文語体の日本語が調査の壁になっているとの背景が紹介された。

日本語新聞は真珠湾攻撃直後に急襲を報じており、即座に発行停止となったわけではない。休刊日で号外も出ず、翌日発行となった新聞記事では、冷静な対応で法や命令を守り、アメリカへの戦争協力や忠誠が求められていた。日本語新聞は軍が読めないため猜疑心が抱かれたものの、同時に日系人に対して情報を流す便利な道具でもあった。情報漏洩の危険性を理由に12月12日発効で英字新聞以外の発行が禁止された。日本語新聞の中でも親日的報道の幹部が逮捕連行され、発行が不可能となった。

16万人もの日本人、中でも3.5万人の1世は英語が読めないため、日本語新聞がないと情報が途絶えた。そこで、日本発信の短波ラジオであるラジオ東京に情報を頼ることになった。日本のプロパガンダが利用

されることに危機感を抱いた軍は、日本語新聞の再刊を許可することとなった。

1946年1月8日に再発行された日本語新聞は2紙だったが、休刊の間に社員は激減し、販売、広告収入も途絶え、経営危機に陥っていた。日布時事は再刊を望まなかったものの、軍の許可は実質的には命令に相当するため、再刊せざるを得なかった。日本語新聞は検閲を受けた英字記事の逐語訳に限られ、FBIが確認作業を行った。分析や批判的な内容は英文の時点で差し止められ、積極的検閲として掲載内容や言葉遣いについての指示もあった。

アメリカ本土とは対照的に、ハワイでは再発行が命令され、戒厳令下での権限として政策上必要な内容が盛り込まれた。ハワイでの軍の強硬な姿勢は、本土であればキャンプ内の状況に比類する統制であった。統制が報道の自由の問題として認識されなかったという間隙を今後の研究で埋めたいとして、報告がまとめられた。

フロアからの質問としては、再刊後に記事を書いたのは誰か、新聞人の逮捕で日本の政府系プロパガンダ記事を書かなくてよいと歓迎した人はいなかったのかとの質問に対し、30-40代の部下で日本語ができる数名がその役を担ったとの回答があった。同盟通信社などを積極的に使っており、無料で日本情報が得られて有用だったり、差別された1世が日本の世界進出でプライドを維持するなど、矛盾を感じていなかったと説明された。連行された人と残った人のイデオロギー的差異はそれほどなかったと説明された。

ハワイの他のアジアの言語の新聞は刊行できたのかという質問に対し、中国語やフ

イリピン語の新聞もあったが、英字紙以外は全て発行停止となった。しかし、軍部が主として気にしたのは日系新聞であり、それ以外は気にしていなかったと回答された。非言語的な写真、映画など、言語に頼らない視覚メディアを入れた言語空間はどうだったのかという質問に対し、新聞には写真や漫画も登場し、特に漫画は軍が拡大して別配布もしており、メディアミックスは行われていたとの答であった。ただし、音に関しては短波が地下で利用されたようだが、史料が残っていないと追加された。より過激な人物が放置され、布哇報知の記者が大量逮捕されるのは不思議だとの質問に、逮捕されなかった人物に関する情報が FBI になく理由は不明だが、一社つぶせばよいと思ったのでは、との説明があった。以上のような質疑応答で、水野報告が終了した。

最後の報告は上林朋広会員の「複数の自伝、複数の書き手、複数の自己—ブッカー・T・ワシントン自伝の出版史的考察」で、20世紀転換期に最も重要な黒人指導者となったワシントンが出した3点の自伝的著作に焦点が当てられた。ワシントンはタスキーギ学院校長に就任し、職業訓練を重視し、北部白人からの金銭支援や南部黒人の支持を得た一方で、人種隔離は黙認した。

ワシントンの自伝には、最もよく知られる『奴隷より身を起こして』(1901年)の他に、『わが生涯と仕事の物語』(1900年)と『私が学んだこと』(1911年)の2冊があり、出版形態が異なる3種類が存在する。全て代筆者の協力を得た執筆によるという共通点があり、「あなたの本」と呼ぶなどワシントンに作者意識は見られない。富裕層向けの学園の資金収集など、出版の目的も

各編で異なっている。それに伴い内容がどのように異なるのかを検討したい。

先行研究では、南部の黒人指導者であるワシントンが、タスキーギ学院を理念ではなく、現実な目的を持って運営する様子が論じられた。ハーランは、ワシントンの自伝が正確ではなく、自己宣伝として事実が取捨選択されているとする。本報告では、伝記の形成過程に注目し、ワシントンの自伝の執筆者の役割や、学院の運営、また書き手の思惑などを指摘していきたい。

刊行順にみると、『わが生涯と仕事の物語』が最初で、通常の出版形態ではなく自伝とするようにとの助言に従った。ウェバーという代筆者に丸投げしたため、引用が多く乱雑で取り留めがなく、内容もワシントンの個人史とタスキーギ学院の歴史や教諭、カリキュラムの紹介などが混在している。

次が社会改良家の雑誌に掲載した記事を本としてまとめた『奴隷より身を起こして』で、白人ジャーナリストのスラッシャーの協力を得た。一貫性があり、ワシントン個人の経験が明確になる内容で、個人の観点を入れたり、口述筆記の反復を削るようにとの編集者のアボットによる助言を反映している。枠組みや文体には前書と共通の部分もあるが、内容は個人の成長物語として修正されている。黒人投票権剥奪については、投票権を認めるべきだと一言述べるに留まり、逆に奴隷制・再建期時代を扱った部分が増した。こうした変化には、黒人向けか白人向けかという読者層の違いや流通形態の違いも影響していた。

3番目の自伝は社会学者のパークが書いたが、パークは代筆者という地位を不満に思い、少なくとも協力者としての扱いを求

めた。以上をまとめると、3つの自伝には複数の視点間の差異や変遷がある。自伝の出版過程において自己呈示のスタイルを変えたため、時系列に並べてもワシントンの人格形成のドラマは見えない。本報告では、自伝をワシントンの自筆として扱ってきた先行研究とは異なり、代筆者の存在に目を向け、出版過程において誰の助言が影響したか、また作者名が持つ機能を意識して、自伝がどのように組織的に生産されたのかを明らかにした、とまとめられた。

フロアから朝鮮総督府によるワシントンへの言及が指摘されたが、朝鮮半島では具体的政策はなく、イギリス植民地下でタスキーギ学院の事例をインドや南アフリカに生かそうとした動きがあった点が紹介された。南アフリカではデュボイスの著作は警

戒され、ワシントンには需要があるなど対応が異なる、と付け加えられた。

次にワシントンが女性の役割をどのように見ていたか質問され、自伝の中に女性が登場しないとの説明があった。ただし3番目の妻は読書倶楽部の会長をし、いかに本が読まれるかという情報を彼女からワシントンが得ていたのでは、と補足された。ヨーロッパ旅行の本では女性参政権運動に対しては批判的であった。女性に関する情報が出てくれば論文でも書いていきたいがまだ積極的に探してはいないとの回答があり、セッションが終了した。

自由論題のセッション1に参加した会員数は46人であった。

(文責 大津留(北川) 智恵子)

[戻る](#)

自由論題報告 セッション2

日時： 2017年9月24日(日) 10時00分～12時00分

会場： 愛知県立大学長久手キャンパス 講義棟東棟 H202 教室

報告： 竹林修一(東北大学)

「マルクスからフロイトへ——1960年代ラディカリズムと性解放運動」

宗像俊輔(一橋大学・院)

「鉄道システムがつくった労働規範——セントラル・パシフィック鉄道の『従業員用時刻表／サービス規程集』を例に」

相川裕亮(慶應義塾大学・院)

「ビリー・グラハムと彼のお気に入りの政治家たち——リチャード・ニクソンとマーク・ハットフィールドにおける『罪』と『預言』」

司会： 野口久美子(明治学院大学)

セッション2では自由論題として三つの報告が行われた。以下、報告順に紹介する。

竹林修一氏は「マルクスからフロイトへ：1960年代ラディカリズムと性解放運動」と

題された報告で、3名の思想家（ウィルヘルム・ライヒ、ポール・グッドマン、ハーバート・マルクーゼ）の言説分析を通し、同時代の社会改革運動の中で「性」が政治化されていく過程を明らかにしている。こうした知識人は、戦後アメリカの性解放運動の思想的な「源泉」としてフロイトの精神分析論に着目し、マルクス主義が終焉に向かう中、その代替思想としてフロイトを戦略的に継承した。アメリカの性解放運動は、同時代の社会改革運動と複雑に絡み合いながら進展してきたが、それらの相互関係について研究史上では等閑視されてきた傾向がある。竹林氏によれば、ベトナム反戦運動とカウンターカルチャーに思想的影響を与えた上記の知識人は、人間の内面分析とその治療、改善を目指す性解放こそ、マルクス主義では成し遂げられなかった社会変革を遂行するための、ラディカリズムを備えていたとする。一方で、社会改革のための性解放をめざす彼らの行為は、結果として当初の目的を達成できたとは言えない。竹林氏によれば、フロイトを曲解し、また急進的な性解放を唱えたこれらの知識人による主張は、冷戦構造におけるアメリカの「自由」を部分的に継承してはいるものの、広く大衆に受け入れられるまでには至らなかったのである。会場からは以上の言説が社会運動に継承される具体的過程について、ラディカリズムの規定について、性解放を受け入れる歴史構造についての質問があった。

第二報告の宗像俊輔氏による「鉄道システムがつくった労働規範—セントラル・パシフィック鉄道の『従業員用時刻表／サービス規程集』を例に一」では、鉄道開業後の列

車の運行頻度や輸送力、それを支える作業員たちの働き方や規則など鉄道の「場」に焦点を当て、そこに19世紀のアメリカ社会構造の形成や変容がどのように影響しているかを分析している。当時のアメリカでは、未熟な鉄道技術と鉄道労働者の職業倫理の低さを主たる原因とした鉄道路事故が頻発していた。こうした状況を改善するために、セントラル・パシフィック鉄道が定めたのが「従業員用時刻表／職務規定集」である。宗像氏は、この時刻表と規定集を丹念に読み込むことで、鉄道の現場で労働規範が制度化されていく過程を明らかにした。具体的には、労働規範を制度化する雇用者と、それを遵守することを義務づけられた熟練労働者（乗組員や駅員）との関係性が作られ、さらに「時間」を強く意識したインフラとしての鉄道において、顧客のみならず、鉄道労働者にも時間厳守の意識づけが行われた。宗像氏はこうした事象から、元来、革新主義期に定着していく安全思想について、その誕生を鉄道会社が牽引していたこと、その二次的産物として労働者に同一の規則や規範を効率的に定着させられたことを指摘する。「安全」を巡る思想形成と実践の過程において、鉄道は従来の研究で等閑視されてきた「営業」と「運行」の経験からこれらに貢献し、その影響は革新主義期の制度設計にまで波及したのである。会場からは、連邦政府が労働者管理に乗り出す背景、「機関士友愛会」の具体的な性格、構成員、労働規範の実施状況に関する質問や、報告内における「鉄道労働者」の具体的な規定の必要性などの意見が示された。

第三報告は、相川裕亮氏による「ビリー・グラハムと彼のお気に入りの政治家たち：

リチャード・ニクソンとマーク・ハットフィールドにおける『罪』と『預言』である。相川氏は、ビリー・グラハムを軸に、グラハムの「理想の政治家」としてのマーク・ハットフィールドと、一方で彼が最も支持した政治家、リチャード・ニクソンという三人の「宗教的人間」が政治的トップとなっていた時代における政治と信仰の関連性を読み解くことで、戦後のアメリカ合衆国に継承されていくキリスト教徒による政治参加の一つの在り方、その思想的根幹を解き明かそうとする。「なぜグラハムは信仰の在り方がより近いハットフィールドではなくニクソンを選んだのか」。相川氏は、まず「罪」と「市民宗教」を巡るグラハムとハットフィールドの言説分析により、両者には「伝統的」なキリスト教概念である「罪」を巡り政教観の違いがあると指摘する。つまり、「福音伝道者」としてのグラハムが罪深き人々の心情を汲んだのに対して、ハットフィールドは「預言者」として現世との妥協をよしとせず、「市民宗教」をその妥協

の産物とみたのである。相川氏によれば、「グラハムは『福音伝道者』として罪深き人間の弱さを認識していた故、『預言者』ハットフィールドのように悔い改めを求めて疲弊したアメリカ国民を追い込むのではなく、ニクソンを中心に『一致』を求めて人々を鼓舞し、癒そうとした」と分析する。最後に本報告は、グラハム以降の市民宗教を体現したような「キリスト教右派」と共和党の結びつきを、預言者、ハットフィールドの信仰の在り方の「敗北」と結論付けて締めくくられる。会場からは、先行研究におけるニクソンとグラハムの位置づけ、先行研究との相違点、また報告内の対抗軸に関する補足的説明を求める意見があった。

以上、いずれも一次史料を丁寧に読み解き、鋭い批判眼をもって先行研究を継承しつつも、「現代のアメリカがいかにつくられたのか」に答えようとする挑戦的な視点を提示するものであった。

(文責 野口久美子)

[戻る](#)

シンポジウムA

「言論空間から見るアメリカ史——奴隷制問題をめぐる印刷文化と連邦体制」

日時: 2017年9月23日(土)14時00分～17時30分

会場: 愛知県立大学長久手キャンパス 特別講義棟 S101 教室

報告: 肥後本芳男 (同志社大学)

「アンテベラム期の印刷文化とアボリショニズム ——郵便妨害から請願棚上げ論争へ」

朝立康太郎 (西南学院大学)

「先鋭化する南部論——奴隷制擁護を巡るアンテベラム末期の言論空間」

中野博文 (北九州市立大学)

『連邦離脱危機』の起源と帰結—アダムズ家の戦いを中心として—

討論者：佐々木孝弘（東京外国語大学）

司会：久田由佳子（愛知県立大学）

本シンポジウムの企画の発端は、ここ数年本学会においては19世紀アメリカ史、特に前半、南北戦争以前に関するシンポジウムが皆無であるという現状に鑑みて、アンテベラム期を専門とする研究者数名に対して何か企画ができないかと尋ねたことにあるが、最終的に中野博文氏による企画案が採用され、1830年代から南北戦争に至るまでの印刷文化と奴隷制廃止・擁護の両論を議論の中心に据えることになった。フロアからの複数のコメントにもあったように、期せずして起こった南部連合軍ロバート・E・リー将軍の銅像撤去問題をめぐる暴動は、南北戦争前後のアメリカ史を今日、捉え直すことの重要性を示している。

最初の肥後本報告では、印刷文化に支えられた近代的な言語空間（世論）の出現と言論・出版の自由という観点から、アボリショニズム（奴隷制即時廃止論）と1830年代のアメリカの政治文化の変容が明らかにされた。とりわけアボリショニストによる郵便キャンペーン、西部の反アボリショニストによるイライジャ・ラヴジョイ虐殺事件、連邦議会に対する反奴隷制請願運動とそのインパクトとしての請願書棚上げ措置（Gag Rule）が、北部・西部を中心に政治文化の変容をもたらし、奴隷制の温存をコンセンサスとする「二大政党制に楔を打ち込む」結果となったと論じられた。

第2の朝立報告では、アンテベラム末期、1850年代における南部の言語空間、とりわけ南部知識人が南部奴隷制社会を総体とし

て肯定・擁護・推進することを目的とした「南部論」の特質が明らかにされ、南部の言語空間における連邦離脱という選択の意味が問われた。ジョージ・フィッツヒュー（1806年ヴァージニア生まれ）とヘンリー・ヒューズ（1829年ミシシッピ生まれ）の言論が南部論として俎上にあげられ、アボリショニストの「扇動」に対抗するなかで先鋭化した南部論が南部の世論形成に作用し、もはや「一つの国家を形成するというヴィジョン」を見いだせなくなった南部社会は、独立への道を突き進んだという。

第3の中野報告は、ジャクソン期から19世紀末まで一貫した政党政治文化が社会の基底に存在したことを強調しつつ、政党と言論の結びつきから、アンテベラム期から再建期の連邦政治におけるアダムズ家3世代の動向を考察した。マサチューセッツ州に基盤をおいて活動したジョン・Q・アダムズ、その息子チャールズ・F・アダムズ、さらにその長男ジョン・Q・アダムズ2世に焦点をあて、チャールズ・F・アダムズの創刊した『ボストン・ホイッグ』紙が巻き起こしたホイッグ党内の派閥対立を糸口に、奴隷制をめぐるダニエル・ウェブスターとの戦いが、共和党結成を経て、ジョン・クインシー・アダムズ2世と共和党急進派との抗争になっていく経緯を描きだそうとした。

3人の報告に続いて佐々木コメンテーターからは刺激的なコメントがよせられ、フロアを含めた質疑応答でも活発な議論がお

こなわれた。最も大きな点は、このシンポジウムのテーマである「言論空間」とは何か、という問いである。19世紀前半、アメリカ各地で発行された新聞の数は爆発的に増加し、公共圏の形成に大きな影響を与えたことから、3つの報告はいずれも活字媒体の果たした役割を重視し、新聞・雑誌といった印刷物に焦点を絞ってはいたが、アプローチのしかたは様々であり、またフロアからは逆にオーラルなもの含まれないのかといった問いも出された。

また、歴史研究は時の経過にともなう変化を扱うものではないのか、という点もコメントとして出された。南部論をスタティックなものとして論じてよいのか、活躍した時代の異なるアダムズ家3世代を一体のものに見なしてよいのか、という点である。

様々な論点から活発な議論がおこなわれ、多くの課題を提示したシンポジウムであったことは間違いない。アメリカ史の中での言論空間が何を意味するのかについて十分な議論を展開できたとは言えないまでも、この問題の重要性に疑問をいなく研究者はおそらくいないであろう。このシンポジウムがきっかけとなって、今後は研究者たちの中でこの問題についての議論が活発化していくことを期待する。

なお、本シンポジウムは、愛知県立大学地域連携センター協力事業「愛知県立大学アメリカ史公開シンポジウム」として一般公開され、一般参加者9名を含めて参加者は88名を数えた。

(文責 久田由佳子)

[戻る](#)

シンポジウム B

「マイノリティ史研究と環太平洋世界」

日時： 2017年9月24日(日) 13時00分～16時00分

会場： 愛知県立大学長久手キャンパス 講義棟東棟 H201 教室

報告： 菅(七戸)美弥(東京学芸大学)

「トランスパシフィックな移民・移住史とセンサスのリンケージ——1860-70年」
李里花(多摩美術大学)

「環太平洋的視点からみる20世紀前半のハワイ・コリア系移民女性の舞踊——舞踊史の地域間リンケージ構築に向けて」

松坂裕晃(ミシガン大学・院)

「つながる/つながらない『マイノリティ』運動——トランスパシフィックな反帝国主義と人種・民族関係」

討論者：徳永悠(京都大学)

兼子歩(明治大学)

司会：佐原彩子(大月短期大学)

アメリカにおけるマイノリティ史は、人種やエスニシティがどのように構築されてきたかを批判的に問うのみならず、それらの概念を通じてマイノリティ史を時間的・空間的に広げていくことに取り組んできた。たとえば最近では、複数の集団間でのダイナミクスのなかで地域コミュニティがどのように変容しながら形成されてきたかを問う研究など、人種やエスニシティ集団に閉じた視点からではない研究成果も出されるようになった。しかし、そうした研究も、ナショナルに閉じた形で行われてきた面は否めない。このような問題を乗り越えるために、シンポジウム B では、アジア系アメリカ研究における新しい方向性を示唆する、トランスパシフィック論に取り組む研究者たちの報告を取り上げた。

第一報告では、菅（七戸）美弥氏が、一次史料とセンサス調査票を相互参照することで、従来ナショナルな文脈で検証されてきたセンサス史と日本人移民・移住史をリンクし、日本人移民のトランスパシフィックな移動の軌跡を明らかにした。とくに一般の人びとの移動に注目し、史料からその人びとを描き出そうとする試みを紹介し、センサスに書かれた名前が書き間違えられているケースなど、センサス史料の史料としての面白さを喚起する報告でもあった。

第二報告では、李里花氏が、従来「踊らない」女性が踊るようになった歴史と考えられてきたハワイにおけるコリアン舞踊の歴史を問い直し、地域横断的視点からコリア系女性の主体性確立のあり方を、身体的・心理的变化も含めて検討した。それにより、もともと踊ることに対して「複雑な

思い」を抱いていたコリア系移民女性が「新しい意味づけ」をして踊り始めたことが明らかにされた。

第三報告では、松坂裕晃氏が、戦間期にニューヨークなどで活躍した左派の運動家、石垣綾子・栄太郎夫妻の活動をトランスパシフィックな視点から見直し、日米の社会主義運動のつながり、そしてその可能性と限界を指摘した。本報告は、彼らがニューヨークや東京で築いた国際的な人間関係を明らかにし、彼らがアメリカで制作した作品が日本で公開された過程を論証することで、「トランスパシフィック」な社会運動のあり方を描き出したものであった。

徳永悠氏からは、三報告における「トランスパシフィック」や「環太平洋」という概念を中心に質問がなされた。それらの概念を通して、太平洋地域における越境的な因果関係や連鎖関係を論証し、その歴史的な重要性を説明できるかが重要となると考えられるからである。たとえば、徳永氏によると、石垣綾子は 1937 年からロサンゼルスに拠点をおく日本語新聞『羅府新報』で客員記者として働いたため、綾子と栄太郎の活動を、カリフォルニア州を含む在米日本人移民のネットワークと社会主義運動家のネットワークという二つの越境的な世界の交差点の中でとらえるとさらに、太平洋を越える人の移動がその経路以上にどのような意味を含んでいるのか明らかになるとの指摘があった。

兼子歩氏からは、移民史、マイノリティ史／マイノリティ研究は、いかにしてそのゲッター化を脱し、「アメリカ史」そのものに対してインパクトを持ちうるかとの観点

から、各報告へ質問がなされた。たとえば菅報告に対し、さまざまな史料の使用を通して、日系移民史／日系アメリカ人史研究がはらむ問題点をどのように克服する可能性があるのか、そして、それを通じて、「アメリカ史」そのものを読み直す可能性について問いが投げられた。三報告を通して、明らかにされた何層もの「トランスパシフィック」が、オルタナティブなつながりとイマジネーションに開かれうる世界を示していたことを指摘しつつ、その世界を生み出しつつ、同時にその可能性を閉ざす仕組みのひとつとしての「アメリカ史」の語りについて検討する重要性が示唆された。

フロアから、とくに李報告に対して、ジェンダーの観点から女性が文化を担っていくという役割をアジア系女性が自ら負って

いったのか、アジア系女性がエスニックアイデンティティを確立していく過程で、その近代化との関係からアメリカ社会にとって都合の良いマイノリティ像を演じていったのか、など興味深い質問が投げかけられた。松坂報告とも共鳴する問いでもあるが、植民地支配の歴史的变化とそれに抗う運動を担ったマイノリティの活動が歴史学的に論じられるための今後の研究課題が提起されたといえよう。そのほか活発な議論が繰り広げられ、帝國的な権力によって分割されていく世界において、その亀裂をぬっていく可能性をもつマイノリティ史を改めて考えることの重要性を確認することができた。

(文責 佐原彩子)

[戻る](#)

シンポジウム C

「アメリカ史のなかの『余暇』」

日時： 2017年9月24日(日) 13時00分～16時00分

会場： 愛知県立大学長久手キャンパス 講義棟東棟 H202 教室

報告： 川島浩平(武蔵大学)

「両大戦間期のアメリカンフットボール——日米両国におけるスポーツと余暇についての一考察」

北脇実千代(日本大学)

「余暇活動とビューティ・カルチャーの交差——戦前の日系アメリカ人社会の事例から」

南修平(弘前大学)

「つくられる余暇、享受される余暇——第2次大戦期とその後の造船労働者と電気工の『絆』を考える」

討論者：板津木綿子（東京大学）

司会： 畠山望（東京大学・院）

私たちがアメリカ合衆国の歴史を教える際、映画、アミューズメントパーク、スポーツ、旅行、ショッピングなど、余暇に愉しまれていた活動を教材にすることは非常に有効であり、学生からの人気も高い。それは、余暇が自由で解放的な性格を持ち、時代の写し鏡として人々の姿を生き生きと映し出すからである。しかしながら、アメリカ史研究において余暇をめぐる研究は散発的には見られるものの、統合的な検討が行われることは少ない。本シンポジウムでは、アメリカ史の異なる場所と時代の余暇活動を取り上げ、余暇の特徴や変遷を検討した。その際、余暇がどのように権力と相関し、ヘゲモニーの一部として秩序やシステムの安定に寄与してきたかに注目し、「家庭内」や「私的空間」における余暇の理解についても考察した。

第一報告の川島浩平氏は両大戦間期におけるアメリカンフットボール（以下、アメフト）に関する主要な解釈を紹介し、その上でシンポジウムの主題である余暇の観点から研究の方向性を示した。今やアメリカで圧倒的な人気を誇るアメフトはカレッジスポーツの代表として発展し、両大戦間期には国力の維持装置として重要な地位を得るようになった。しかし、余暇の観点から捉え直すと、アメフトは戦間期には既に本来の意味での余暇活動からは乖離していたと川島氏は指摘した。アメフトのルールはより厳正化され、商業的な色合いが濃くなっていた。「真面目化」、「プロ化」したアメ

フトは、ヨハン・ホイジンガの言葉を借りれば「もはや真の遊びの精神はない」ものに変化していたのだった。しかし、テールゲイティングなどの観客向けの娯楽を検討すると、余暇活動としてのアメフトの新しい側面を見出すことができると川島氏は論じた。

第二報告の北脇実千代氏は 20 世紀初頭の日系アメリカ人女性の余暇活動とビューティ・カルチャーに焦点を当てた。戦前期の日系アメリカ人女性は労働や家事育児に追われ、身なりを気にする余裕は殆どなかったものの、時折、ピクニック等の催しでおしゃれを楽しんでいた。おしゃれをするための衣服調達を目的とした購買活動も増加したが、1910 年代、20 年代のアメリカ社会では衣服は購入するよりも、家庭で裁縫して調達することが一般的であった。ここで重要となるのは、裁縫という行為の位置づけである。裁縫は家事という無償労働が有償労働になりうる活動だった一方、「趣味」の領域でもあった。裁縫は芸術的な側面を持つ創作活動の一つでもあり、「女性性」や「母性」、そして愛情を示す手段としても機能した。つまり、裁縫が「労働」なのか「余暇」（趣味）なのかということは、行為者の感情次第の面もあり、二つの境界は曖昧であったと北脇氏は指摘した。

第三報告の南修平氏は余暇を「白人労働者階級」を結びつける要素の一つと位置づけ、二つの事例を通して労働者の生活全体の中で余暇がどのように認識され、いかな

る役割を演じていたのかを考察した。一つ目の事例である第2次世界大戦期のブルックリン海軍造船所(BNY)の祝祭行事では、戦時下に公権力が労働者の余暇に強力に介入した様子を見た。二つ目の戦後の「エレクチェスター」の電気工労組の事例では、余暇活動がジェンダーにより明確に役割分担されていたことや、余暇活動が電気工コミュニティの絆を結ぶ装置として働いていたことを確認した。南氏は戦時下において余暇は「愛国的アメリカ（白人）市民」としての実感を得るためのものであったのに対し、戦後ではハードワークに対する見返りとしての物質的成果（「豊かさ」）を享受するためのものであったと分析した。

報告に続き、板津木綿子氏からコメントが寄せられた。板津氏はまず、余暇研究の

第一人者であるクリス・ロジックによる余暇の定義を紹介した。ロジックによると、余暇 (Leisure)は常に権力との関係によって成り立っており、「体制維持」、「優位性」、「抵抗」という三つのパターンを見ることができる。板津氏はロジックの定義と照らし合わせながら、三者の報告を丁寧に解釈し、資本主義社会の中での余暇の意味、時間の概念と余暇、余暇の副次性について報告者に質問した。時間の制限のため、フロアからの質問やコメントに時間を割くことはあまりできなかったが、参加者からは自分自身の研究にも照らし合わせて余暇の概念について検討するよい機会になった、というコメントが寄せられた。

(文責 畠山望)

[戻る](#)